

近代の西欧における育児用具の変遷とその空間的な意味について

著者名(日)	柴崎 正行, 濱田 彩希
雑誌名	大妻女子大学家政系研究紀要
巻	50
ページ	41-47
発行年	2014-03-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1114/00005994/



近代の西欧における育児用具の変遷とその空間的な意味について

柴崎正行¹⁾・濱田彩希²⁾

¹⁾大妻女子大学家政学部児童学科, ²⁾蒲田保育専門学校

Changes in the Use of Baby Appliances in the Modern Western World and their Spatial Implications

Masayuki Shibazaki and Aki Hamada

Key Words: 育児用具 (baby appliances), 空間 (space), ゆりかご (cradle), 歩行器 (walker), 乳母車 (baby carriage), 子ども部屋 (children's room)

はじめに

日本の子育ての歴史を振り返ると、明治末期頃から第二次世界大戦後にかけて、その育児方法が急激に変化していくことがわかる。「負ぶり紐」を使用することや、「えじこ」と呼ばれる子どもを入れておく籠にかわって、「ゆりかご」や「歩行器」、「乳母車」や「ベビーベッド」などが次々に登場してきて、日本の育児方法は昭和時代にかけて大きな変遷を遂げてきた。その極めつけが「子ども部屋」である。現在ほどの家庭にも備わっている子ども部屋の中を覗くと、子どもたちが喜ぶたくさんの玩具や人形が置かれており、テレビはもちろんのこと勉強用の机、そして知識の詰まった書物が並ぶ本棚などが置かれている。そして何よりも多くの子どもたちが憧れてきた子供用のベッドも置かれている。

そこで本論では、特に明治以降において日本に取り入れられるようになった西欧式の育児用品であるゆりかご、歩行器やベビーベッド、そして乳母車や子ども部屋といった育児用具や育児空間が、西欧社会の育児の歴史においてどのように取り入れられてきたのか、その導入過程について検討してみることとする。さらにそうした育児用品や子育て空間のもつ西欧的な意味についても、具体的に考察してみることとする。

1 西欧の家屋における子育ての場の変遷

地誌空間学者のイーファートゥアンが述べているように¹⁾、西欧の中世以降の家屋の歴史は、自己意

識の拡大に伴う空間の分割化の歴史といえる。それは共同体としての家族が、会話によって結ばれている口承伝達による生活共同体から、識字能力の向上により書物や書類を介した個人的な契約を基盤にする社会共同体へと変容していく歴史でもあった。

話し言葉の世界は常に話す人と聞く人とが会することを必要としており、伝承したいことを個別に話していくよりも、関係者が一堂に会して伝え合う方が効果的でもある。また言葉は年齢や職種を超えて共有できるものであり、そこに集い会話する人々は共同体としての意識を持つことができる。そのため集まった人たちは、お互いに顔見知りになり、年齢を問わずお互いの存在を認め合うようになっていった。その意味では話し言葉を獲得した子どもは、日々の生活のなかでの集いを通して当然のように大人の世界の一員として認められるようになっていく。17世紀までは大人と子どもの区別がいまいであったことの一つとして、地域全体がこうした話し言葉により媒介された口承伝達の共同体に生きていたことも挙げられるといえよう。

こうした背景から、文字が聖職者や経営者などまだ一部の特権的な人々の伝達手段でしかなかった中世以前の家は、家族はもちろんのこと使用人や仕事での徒弟も含めて、多くの人達が一堂に会して会話を通して伝承し合う場、いいかえると話しを交わせる社交的空間を中心とした家屋構造になっていたことが知られている。

農業と家内工業が中心であった中世までの社会では、図1に示したように、朝の広間での食事の時間がこうした言葉による伝承の時間となっており、広

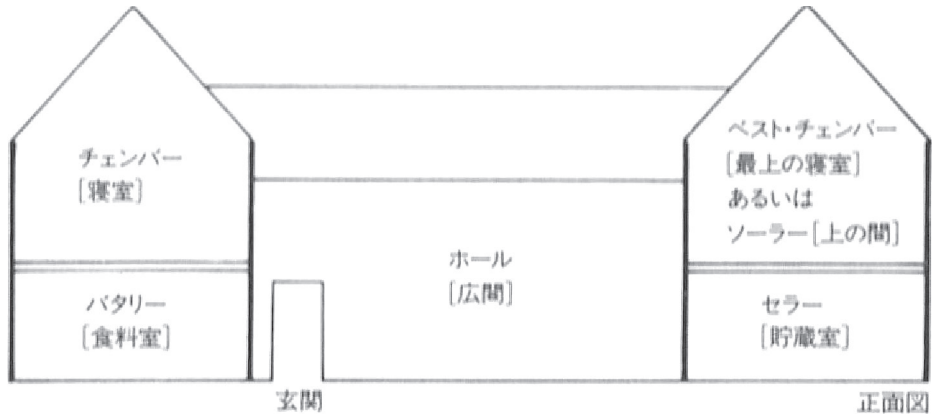


図 1 西欧の中世までの基本的な家屋構造 (出典：イーファートウアン「個人空間の誕生」¹⁾)

間で家族や使用人が一堂に会して朝食がなされるのが普通であった。その家の使用人が多ければ広間も広大な空間を占有しており、家屋の中での個人的な空間は寝室のみであった。また夜は広間で家族で過ごしていたが、昼間はできない縫いものをしたり、知人が訪れて大人が団樂するという時間であって、乳幼児は大人の会話や仕事を邪魔しないように早くから寝室で寝かしつけられていた。

すでにフィリップ・アリエスが「子供の誕生²⁾」において明らかにしたように、西欧では中世から 18 世紀にかけて、家族の中で子どもたちに対する意識が大きく変化していった。それまでは家族の一員としては厄介者としての存在であった子どもが、次第に家族にとって大切な存在として意識されるようになり、その保護と発達に対する関心が高まっていった。こうした背景には、産業革命の進行の中でグーテンベルグにより開発された印刷技術の広がり大きな意味をもっていた。それまではパピルスや羊の皮などに写本されていた聖書が、彼の活版印刷技術の開発により紙に大量に印刷されることが可能となり、最初は聖書を普及させ、そして次に学術専門書を普及させると、さらには芸術作品としての詩や小説等の普及を可能にしたのである。

こうして印刷物の普及と共に社会には書物が行きわたり、それに伴い読み書きの獲得の必要性が社会一般にも認識されるようになっていった。その獲得のために子どもたちは学校へ通うようになり、子ども期の発達への関心が社会全体として高まっていったことがあげられる。大人たちの子ども期の発達に対する関心は、乳幼児期での純粹性、家庭における家族の親密性、学童期に学校で真面目に勉強をする

道徳性などに向けられるようになり、子どもたちに大人の期待に応えるような発達を求めるようになり、それが家庭生活の過ごし方や家屋空間の構造に大きな変化をもたらしていった。

何よりも 17 世紀以前には使用人や徒弟などと一緒に食事をしたが、18 世紀以降は食事は家族だけになり、食事の場は調理をする場と食事をする場とが近接するようになりダイニングルームを形成するようになった。また図 2 に示したように、広間は家族で楽しく過ごせる場へと変化していき、壁には絵画が飾られ、本棚が置かれてたくさんの書物が並べられ、貴族的な文化を感じさせる落ち着いた空間となった。また 18 世紀以降になると、そこにはピアノも加わり、広間の壁には様々な絵画や彫刻が飾られて美術館的な空間が生み出され、室内はコンサートホールを兼ねるようになり、そして昼間は主人が書類を作成したり読書をする書斎となり、夜は家族で書物を話題に会話を楽しむ団らん空間の役割を果たすようになっていった。

このように家の広間の意味が大きく変容した背景には、それまでの仕事を中心とした会話的伝承の場であった広間に代わって、文字の獲得による読み書きに適した空間と時間が必要となったことがある。すなわち広間が手紙や日誌を書く場所であり、そして読書を楽しめる場所として、家族専用の個人的な空間へと変化していったことが考えられる。仕事上のやり取りが文字による書類によりなされるようになると、仕事の間と家庭生活の間を区分する傾向が生まれ、仕事場は別の建物に置かれ、家屋は家族の団樂や読書を重視する場になっていった。家庭の広間は、多くの書物を集積し知識や情報を学ぶ場すな

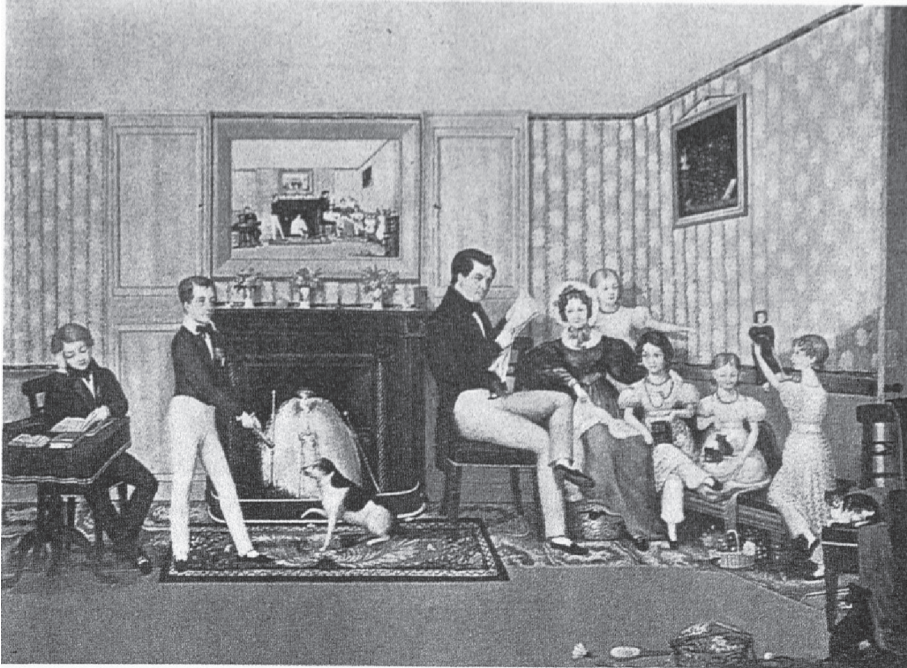


図2 家族の団欒（出典：アニタ・ショルシュ「絵でよむ子どもの社会史」³⁾）

わち書齋的空間や、家族的な親密な時間を過ごす空間としての居間へと変容していったのである。

2 スウォドリング

乳児がハイハイする時期は、勝手に動き回るのどこに行くかわからなくて、危険きわまりない時期であるといえる。そのために日本では、「負んぶ」という方法で大人の背中に括り付けて世話をしていた。しかし西欧には、この負ぶるという方法は存在せず、代わりに図3にあるように、古代のエジプト時代から19世紀頃まで、西欧の多くの地域では「スウォドリング」という育児習慣が行われていた。

その方法は乳児を大きな布で産着の上からぐるぐる巻きにして動けないようにしておくことで、乳児はこけし人形の様な姿のままベッドの上や揺り籠の中に置かれたが、ひどい場合は壁に吊るされることもあったという。生後1か月までは顔を除く全身を包まれたが、その後は肩や腕を出すようになり、だいたい首が座り椅子に座らせておけるようになるまで包んでおくことが一般的であったようである。乳児を包んで動けないようにするこの方法は、乳児をベッドに横たえ、ゆりかごの中に入れておきいつ

でも寝かせることができるので、大変に便利であったと想像できる。

18世紀になるとこのスウォドリングに対する批判が強くなり、特にJ.Jルソーはその有名な著書「エミール」においてこの育児方法をはっきりと否定したので、その影響もあって、欧米では19世紀には一部の地方を除いて、一般的にはあまり行われなくなっていく。

このスウォドリングの空間的な意味としては、2つあると考えられる。ひとつは当時はまだ家屋の中はすべて大人専用の空間であり、そこに子どもたちが入り込む余地はなかったといえる。おそらく子どもたちの自由になる空間は、昼間の外遊びの場に限定されていたと思われる。しかしまだ生まれて間もない乳幼児は危険なので、特に都市部では馬車が行き交っていて危険なので、外には出せなかった。そのために乳幼児の這いたい、歩きたいというような移動や歩行への欲求は、家屋内でしか実現できなかった可能性がある。だが17世紀までの西欧社会の家屋では、家族でゆっくり過ごす空間的、時間的な余裕はまだなく、子どもは家族と共に生活しながら食事部屋や広間や居間、そして寝室などで、大人の邪魔をしないような状態で育児をされていたと考えら



図3 スウオドリリング (出典：入来典著「赤ちゃんの歴史」⁴⁾)

れる。

もうひとつが衛生上の問題である。1348年にヨーロッパには黒死病と呼ばれる伝染病が大流行した。この伝染病は現在ではペストとして知られており、感染者の死亡率は高く、何とこの当時の人口の半数近くが感染して死亡したといわれている。その感染源となるペスト菌はネズミの血液中で生息し、その血を吸ったノミの胃中で増殖したペスト菌が吸血のさいに反流して人間に感染するのである。そのために1350年以降の家庭におけるネズミやノミの発生は、人々に恐怖心呼び起こす事にもなった。

赤ちゃんがハイハイをするためには、床を這わなければならない。しかし西欧社会は靴の文化であり、靴を脱ぐのは寝る時だけである。いいかえると床は、大人が外や通りから靴に着けてきた泥や汚れで満ちていたともいえる。そんな不衛生な床で、乳児を這わせて遊ばせることなど、できるはずがない。当時の西欧には、便所の概念が乏しい者も多く、部屋にオマルを置いて置き、それがいっぱいになると通りに捨てていたとも言われている。こうして不衛生な生活環境への不安が、ペストなどの病気の発生も予測できたために、衛生上の問題から、乳児を床に這わせたり、床で遊ばせたりはしなかったと考えられる。

3 ゆりかご・ベビーベッド

古代から子どもをどう寝かしつけるかは、大人にとって大きな課題となっていたようだ。そのためにローレンス・ライトはその著「ベッドの歴史」のなかで、ゆりかごの歴史についてふれているが、それによれば、古代ギリシャの子どもはすでにゆりかごに寝かされていたという。また9、10世紀の本には木の枝をくり抜いたゆりかごがよく出てくるそうである。

ゆりかごとは、図4に描かれているように周囲が籠や板で囲まれている乳幼児用のベッドであり、ベッドの足元が楕円形状の曲線になっているために、横から籠を押すとベッドが振り子のように揺れて心地よい揺れを生み出す。そのために乳幼児は心地よく寝ることができるのである。また周囲が高く作られているので、乳幼児がベッドから落ちることはなかった。

乳児が安心して眠れる場としてのゆりかごではあるが、その空間的な意味としてはどのようなことが考えられるのだろうか。第1は、ライトが14世紀以降の代表的な貴族の家庭のゆりかごの絵を13点ほど紹介しているが、それを見ていくとどれも豪華であるといえる。庶民の家庭には籠で編んだ程度のゆりかごがほとんどであったと思われるが、王家のゆりかごは宝石で飾られていて、専任の子守りがついてゆりかごを押していたという。その意味では、ゆりかごは富の象徴としての意味を持っていたと思われる。

第2は、どのゆりかごも移動が容易であるということである。1800年代の後半になると、車輪の付いたゆりかごも登場している。このことからゆりかごはその時々状況に応じて広間や居間、寝室など場を移動させながら使用されていた可能性がある。すなわち、大人のそばに置いておき、眠くなったときにはいつでも眠れるようにしていたのだろう。

第3に、ゆりかごとベビーベッドの違いはどのようなものだったのだろうか。乳児が動くようになって揺れることが危険と判断されるようになったときには、ゆりかごから揺れないベビーベッドに移している。ベビーベッドは、ゆりかごよりも重心が低く安定していて倒れにくく作られていた。西欧では添い寝をする習慣がないために、大人のベッドの傍に乳幼児を寝かせることのできるベビーベッドを必要としたのである。

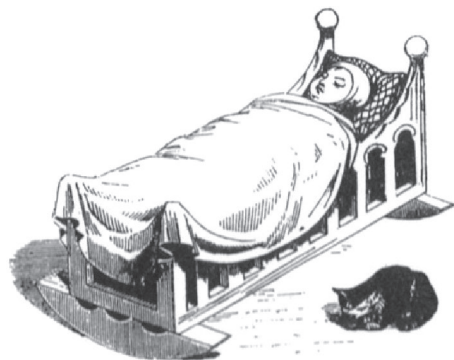


図4 ゆりかご・ベビーベッド (出典：ローレンス・ライト著「ベッドの文化史」⁹⁾)

4 歩行器

幼児の室内を自由に歩き回りたいという欲求に応えるために、17世紀になると、ベビーケイジといわれる、幼児が立って歩き廻るように補助する歩行器が用いられるようになった。

この歩行器は図5のように幼児の腰の周りを囲むような木製の骨組みでできており、脚の部分には車輪がついていて、幼児は手で柵に掴まって自分の体を立てて支えながら、室内を自由に歩くことができ、自分に行きたい方向に向きを変えることができた。この方法で歩きを覚えさせるのは、日本的な感覚では残酷な気もするが、当時の西欧の家庭は床が決して清潔ではなく、衣服もすぐに汚れてしまうために、服を汚さないようにするための工夫でもあったという。さらに歩行器そのものも、子どもたちが汚れた手で触ったり、床の埃りなどのために、使っていると真っ黒になってしまうこともあったという。

この用具を用いることにより、居間や子ども部屋などの閉じられた空間内であれば、幼児は自由に移動し探索することが可能になった。

5 乳母車

そもそも乳母車という乗り物は、西欧においてはどのような目的で使われることになったのであろうか。その点について考察してみると、2つの要因が考えられる。

その第1は、18世紀以降にみられた「子どもの発見の時代」の影響である。1733年にイギリスの建築家ケントは、公爵の子どもを楽しませるため



図5 歩行器 (出典：アニタ・シヨルシュ「絵でよむ子どもの社会史」¹⁰⁾)

に、子どもが座って乗れるバスケットを付けた乗り物を作り、仔馬などに引っ張らせたという。これがヒントになり、他の王室も赤ん坊を載せることのできるキャリッジを作成し、高価な装飾品を付けた赤ちゃん用の乗り物が上流階級に流行ったという。これは乳母車が富の象徴として扱われていたことを示している。

その要因の第2は、産業革命によってもたらされた馬車から鉄道へと変動していく交通手段の変化と、それに伴う路線の拡大である。鉄道が敷かれる以前の馬車で移動していた時代には、乳幼児を抱えた女性が馬車で移動することは基本的には困難であった。しかし鉄道が敷かれ、乳幼児を抱えていても静かで安全に移動ができるようになってからは、



図 6 乳母車 (出典: モリー・ハリスン「こどもの歴史」⁹⁾)

鉄道を利用して乳幼児を載せて移動することが可能になってきた。そのために駅を降りてからの都市での移動手段として乳母車の必要性がでてきたといえる。その便利さは、家庭においても近隣の道が整備されるにつれて、乳幼児を載せて近所に買い物や散歩に出かけるという手段としても使用されるようになったと考えられる。

乳母車に関するほとんどの出典では、その発祥を 1848 年頃にアメリカのニューヨークで作られたものを最初としている¹¹⁾。その製作者のチャールズ・バートンは後にイギリスに渡り工場を操業し、イギリス王室などからも注文を受け、更に一般の家庭に広まったといわれている。その当時の乳母車は、木製で 2 輪の手押し車であったという。

欧米における乳母車の起源については加藤 (1975)⁷⁾ の研究では、「平凡社大百科辞典には春山行夫氏の記述で、1848 年にニューヨークのチャールズ・バートンが造ったのが最初とみられ、バートンは後にイギリスに移って工場をつくり、ヴィクトリア女王やスペインのイザベル女王などから注文をうけ、一般にも広まった。初期のものは木製の二輪車で一本の長い柄が付き、前部の支柱で車が前に傾かないようになっていた。」と記載されており、この記載がその後の論文や書物における乳母車の起源の説明にも使われている。

これらのことから、欧米における乳母車の起源には、イギリスの建築家のケントの造ったキャリッジが最初という説と、チャールズ・バートンの造った二輪車という説の二つがあることがわかる。いずれにしても近隣の整備された道路を家族で散歩するときや、都市部での整備された街路でのショッピングなどに乳幼児を連れていくときなどに用いられるようになり、親子で家庭を離れて楽しい空間を散歩する場合の育児用品として用いられるようになったといえる。

6 子ども部屋

16 世紀までの西欧のキリスト教社会では、子ども部屋という特別な空間は存在しなかった。当時の家庭は農業や家内工業がほとんどであったので、大人中心の生活が営まれており、男子中心の家父長制社会でもあった。そのために子どもの存在はまだ特別な者とは思われていなくて、時には仕事や生活にとって邪魔な存在ですらあった。17 世紀に描かれた世界最初の絵本といわれている有名なコメニウスの「世界図絵」⁹⁾ に描かれた家屋の中にも、まだ子どものための空間は存在しない。図 1 からわかるように、家の構造は食事を作り食べる空間と家族で眠る空間、そして様々な生活用具を保管する空間や客人をもてなす空間などで仕切られていた。

18 世紀を過ぎる頃になると、子どもの存在は将来の家系を担う存在として大切なものへと変化していった。乳児の時にはゆりかごに入れられ、歩くようになると歩行器に入れられ、幼児になると玩具を与えられて遊んで過ごし、学童期になると学校に通って読み書き算を学ぶという子育ての道筋ができて行ったのである。

こうした様々な子どもたちが、昼間は安全に過していられる場、そして夜は子どもたちだけで寝られる場としてふさわしい場所、それこそが子ども部屋として成立していくのである¹⁰⁾。その意味で子ども部屋という空間は、最初は家屋の中で使われていない部屋であることが多く、屋根裏部屋や小さな窓しかないような薄暗い部屋が多く与えられていた。

それが 19 世紀になると、欧米での市民生活の改善が図られるようになり、子ども部屋は単なる寝るための部屋から楽しい遊びの空間へと変化していった。男の子と女の子がいる場合には、別々の部屋が与えられるようになり、そこに置かれる遊具やカーテンやベッドなどは、全く異なる雰囲気を出す

注 1 Wikipedia: <http://ja.wikipedia.org/wiki/2011/03/03>

ようになった。

こうして子どもたちが安全で楽しく過ごせる場として子ども部屋は、19 世紀になってから欧米でどんどん広がっていったといえる。

引用文献・参考文献

- 1) イーファートゥアン著 阿部一訳「個人空間の誕生－食卓・家屋・劇場・世界－」せりか書房 1993 P81
- 2) フィリップ・アリエス著 杉山光信・杉山恵美子訳「子供の誕生」みすず書房 1980
- 3) アニタ・シオルシュ著 北本正章訳「絵でよむ子どもの社会史」新曜社 1992 P95
- 4) 入来典「赤ちゃんの歴史」鳥影社 2000 P67
- 5) ローレンス・ライト著 別府真徳・三宅真砂子・片柳佐智子・八坂ありさ・庵地紀子 訳「ベッドの文化史」八坂書房 2002 P367, P271
- 6) アニタ・シオルシュ著 北本正章訳「絵でよむ子どもの社会史」新曜社 1992 P69
- 7) 加藤 翠「わが国における乳母車の歴史的考察」日本女子大学紀要, 家政学部第 22 号 1-10, 1975
- 8) モリー・ハリスン著 藤森和子訳「こどもの歴史」法政大学出版会 1996 P351
- 9) J.A. コメニウス著 井ノ口順三訳「世界図絵」平凡社ライブラリー 1995
- 10) インゲボルグ・ヴェーバー＝ケラーマン著 田尻三千夫訳「子ども部屋」白水社 1996

Summary

This study examines earlier research on how baby appliances that were adapted into Japan from the Western world since the Meiji era (such as cradles, cribs, walkers, baby carriages, and children's rooms) were incorporated into the homes of the Western society.

Our results show that until the Medieval Period, home structure was closely connected to community and workforce as a societal partnership. With modernization, however, home structure has changed to provide more personal space and time while greater divisions between work and home life, and adults and children took place.

In the process, baby appliances were devised in order to ensure small children's safety and to keep them from disturbing the lives of adults. Eventually, a separate space was created as a children's room.